

シューマッハー経済学の再考⑩ ..... 君あり、故に我あり：自然エネルギーは、不可欠

1986年にチェルノブイリ原発事故が起こった。その直前に新訳の「スモールイズビューティフル」(講談社学術文庫)が出版されていた。フリッツ・シューマッハーの懸念が現実となったのである。

チェルノブイリ原発事故はスリーマイル島原発事故より深刻で大量の放射性物質が大気中に放出され、広範囲の水と土が汚染され経済生活は困難になった。

経済学は人間を環境ぐるみで取り扱う学問であるとするシューマッハー経済学は、環境経済学と呼ばれるようになる。シューマッハーに共鳴したインド人のサティシュ・クマールによって、英国でシューマッハー・カレッジが設立され、環境問題を中心にセミナーが開かれてきた。サティシュは、哲学者デカルトの「我思う、故に我あり」ではなく、インド古来の「君あり、故に我あり」という価値観を掲げた。これは、非暴力と同様に仏陀やキリスト、ガンジーに共通の価値観だった。「神あり、父あり、母あり、故に我あり」に止まらず、「大気あり、水あり、土あり、故に生命あり」となれば、深く環境を重視する価値観となる。

私はシューマッハー・カレッジのセミナーに参加した縁で、サティシュの本を翻訳し「君あり、故に我あり」(講談社学術文庫)と題して出版した。「我思う、故に我あり」は、近代科学の礎になったが、対象を分割、分離する哲学であり、木を見て森を見ざる環境問題の原因になっている。これに対して「君あり、故に我あり」の哲学は、環境依存の経済を築いていく基礎になり、平和な生き方そのものである。

自分の生活から見るならば、新築マンションの合成化学物質の影響で、妻が長いこと体調を崩し、長野県の御代田町に転地療養することになった。化学物質過敏症に対応している自然住宅ネットワークと知り合い、小さいながら無垢の木曽ヒノキ、ぬき構造、漆塗装、しっくい壁、地熱利用の家を建てた。浅間山麓の清らかな大気と湧水、美しい景色と静けさに癒されて妻は健康を取り戻し、畑を借りて自然農法をまねて野菜作りに一緒に励んだ。

身をもって「自然あり、故に我あり」を学んだのである。御代田町は、屋根のない病院と呼ばれており、自然環境の良さのおかげで、難病が治った人もいる。私の場合はパーキンソン病で、簡単には治りそうにないが、希望を持って暮らしてきた。

ところが、その御代田町の環境を脅かす事件が起きた。町が軽井沢町と小諸市のゴミを集めて御代田町の浅間山麓で燃やすガス溶融炉建設計画を発表したのだ。重金属で大気や湧水の汚染が避けられないので、町の水と空気を守る会を立ち上げ、ゴミ問題を考える集会を度々持ち、県知事にも陳情した。

環境アセスメントが進む中で、ゴミを燃やすこと自体が問題と考え、ゼロ・ウェイスト(廃棄物ゼロ)を行う徳島県上勝町に出かけ、町長に御代田町で講演してもらった。町長選で、建設計画の白紙撤回を掲げる町長の誕生に漕ぎつけた。

ゴミの削減、再利用、リサイクルによる一般廃棄物のゼロ・ウェイストは、焼却処分による大気汚染を避けて、最終的には埋め立て処分するものである。

東京電力福島第一原発の事故によって、放射性物質が広範囲に大気に放出され、水や土も汚染されてしまった。原発は通常運転の時でも、大気中に放射性物質を排出しており、運転後の放射性廃棄物は地下埋設で処分すれば水蒸気爆発の危険があるし、地下水の汚染も避けられない。原発を廃止する以外に、放射性物質や放射性廃棄物をゼロにすることは難しいのである。

シューマッハーやエイモリー・ロビンズのいうように、熱力学的に無駄の多い化石燃料や原子力のようなハード・エネルギーから転換し、小型水力、風力・波力、太陽光・太陽熱、薪・バイオマス、温泉・地熱とい

った非暴力的で再生可能なソフト・エネルギー（自然エネルギー）を適材適所に用いていくことが、必要不可欠になっている。

このソフト・エネルギー・パスによって、化石燃料から出る温室効果ガス（二酸化炭素、メタンガスなど）と、原発から出る放射性物質・放射性廃棄物をストップし、新たな堆積を食い止めなければ、人類は生き残れない。

今や「シューマッハーあり、ロビンスあり、故に我々あり」の時代になったのである。

おぜき・おさむ 1942年東京生まれ。東京大学大学院経済学研究科博士課程中退。三菱総合研究所を経て、横浜商科大学商学部教授。2010年パーキンソン病のため退職。著書は「君あり、故に我あり」（サティシュ・クマール著翻訳、講談社学術文庫）など。長野県北佐久郡御代田町で療養中。